

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32417

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03206

研究課題名（和文）高齢期の社会関係の喪失と獲得がもたらす心理社会的効用モデルの構築

研究課題名（英文）Development of the psycho-social model of dynamics in social relationships among older adults

研究代表者

菅原 育子（Sugawara, Ikuko）

西武文理大学・サービス経営学部・准教授

研究者番号：10509821

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：社会関係は心身の健康や主観的well-beingに肯定的な影響をもたらす重要な要因である。高齢者において社会関係が主観的well-beingに影響する心理社会的プロセスを、関係の喪失と獲得というダイナミクスに着目し明らかにすることを目的とした。一般高齢者を対象とした調査およびオンラインでの社会的交流をもつ高齢者への調査を行い、コロナ禍における社会関係や社会活動の維持や喪失のプロセスのモデル化を行った。高齢者の社会関係の維持・喪失に影響する個人要因、社会環境要因について検討し、モデルに組み込んだ。社会関係とwell-beingを繋ぐ複雑な経路を解明する一助となる結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

情報技術の発展や感染症の世界的流行という時代的事件によって人と人のつながりの様相は近年大きく変化している。それは高齢者においても同様であり、社会関係を豊かに維持し発展させる者と、社会的孤立や孤独の状況に陥る者とが併存している。本研究ではそのような差が生じるプロセスを質的研究から明らかにするとともに、量的研究で社会関係や主観的well-beingの変化を生じさせる個人要因、社会環境要因を検討した。本研究の成果は社会関係とwell-beingをつなぐ心理社会的経路を明らかにする研究であり、またその知見は高齢者の孤独や孤立の予防、高齢期のwell-being実現のために活用されるものである。

研究成果の概要（英文）：Social relationships are one of the important factors that influence health and well-being among older adults. Although much attention has focused on the adaptation process to loss of social ties, people may maintain or develop new relationships and gain psychological benefits from these relationships in old age. The present study aimed to investigate the psychosocial processes by which social relationships affect well-being among older adults. Data was gathered with older adults who had introduced ICT-mediated social interactions and activities as well as community-dwelling older adults. The processes that led to the introduction of social interactions through social media or digital communication tools and the maintenance of social relationships were examined. These results revealed personal and social factors that influence the dynamic changes of social relationships among older adults, including the effects of the pandemic and the introduction of new technologies.

研究分野：社会心理学

キーワード：高齢者の社会関係 社会活動 主観的well-being 獲得と喪失

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

家族や友人などの社会関係は、私たちの心身の健康や主観的 well-being に肯定的な影響をもたらすことが、多くの実証研究により示されてきた。高齢者を対象とした研究においては、社会的なつながりを持つことと健康や well-being との関連について、主にソーシャル・サポート理論に基づく研究が蓄積されてきた。また、高齢期においては仕事からの引退、友人および自身の体力の減退などをきっかけとした社会的つながりの縮小や喪失に注目が集まり、縮小・喪失への適応や、喪失の結果生じる孤独・孤立への対策などが検討されてきた。

しかし、高齢者は社会関係を一様に失うばかりでなく、新たな社会関係を構築し、その関係から新たな心理的効用を得ることもありうる。さらに、高齢期に新たな社会関係や社会的役割を獲得することができる人とできない人の違いをもたらす個人要因や社会環境的要因についても明らかではない。これらを明らかにすることは、社会関係と well-being に関する研究を前進させ、また孤立や孤独を防ぐための施策構築にも寄与すると考えられる。

2. 研究の目的

そこで本研究は、高齢者の社会関係の「喪失」と「獲得」の双方の変化について、どのような要因でそれらの変化が起きているかを明らかにするとともに、社会関係が主観的 well-being に影響する心理社会的プロセスを明らかにすることを目的として計画された。

本研究では、社会関係として友人、活動仲間、近隣づきあい、といった非親族関係を扱う。これらの関係は、家族、親族関係とは異なり自発的な性質が強く、関係の構築や維持、疎遠化が生じやすい「脆い」関係である。高齢になるほど縮小し失われやすい社会関係であることも先行研究で明らかになっている。しかし、それゆえにそのような自発的な関係を持つことは well-being にポジティブな影響を持つことが知られている。

研究では、第一にこれら社会関係の構造的特徴（人数、接触頻度）や交流内容（共行動の有無や内容、資源の交換の有無や内容）が、高齢者の暮らしの中でどのようなきっかけで変化するかを明らかにする。第二に、それらの変化を促進または阻害する個人要因、社会環境要因を明らかにする。そして第三に、社会関係が心理社会的プロセスを経て健康と主観的 well-being に影響する過程をモデル化する。心理社会的プロセスとして、ソーシャル・サポートの交換に加えて、親密性、自己受容感、肯定的感情経験を介したプロセスを仮説的に想定し、それらの複層的なプロセスを説明する統合モデルを構築することをめざした。

3. 研究の方法

申請当初の研究計画では、1年目に65歳以上の男女への半構造化インタビュー調査を実施、その知見から仮説モデルを構築し、2年目に量的調査を実施、3年目に分析、仮説検証、結果をまとめるという3年間の計画であった。

しかし、1年目の終わりに発生した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行により、インタビュー調査は中断となった。また社会全体に広がった「対面での対人交流や社会活動を避ける」「対面活動に代わり ICT を用いた交流や社会活動を進める」という対応は、本研究の目的である社会関係の「喪失」と「獲得」に無視できない影響をあたえることが想定された。この思いがけず発生したコロナ禍という現象は、同時代に生きる人にあまねく影響を与える社会環境要因として、本研究のモデルに組み込んでいく必要があると考えられた。

そこで2年目に研究計画を変更し、高齢者の社会関係にこのイベントが与えた影響を明らか

にすること、研究対象とする社会関係や社会参加行動にオンラインでの交流や社会参加を大きく組み入れること、そしてコロナ禍による社会関係や社会参加行動の変化が高齢者の主観的 well-being にどのような影響を与えうるかを研究に加えることとした。

以上の研究計画の変更に伴い2年間の調査期間の延長を行い、5年間のうちに以下の調査を実施した。①地域でのボランティア活動グループへの、オンライン会議システムを用いたグループ面接調査2件、②SNS上での趣味活動、社会参加活動に関わっている60歳以上9名への、オンライン会議システムを用いた個別面接調査、③SNS上での趣味活動、社会参加活動に関わっている40歳以上への縦断WEB調査（1回目3721人、2回目3235人、両方に回答した人は867人）、④地域でのボランティア活動や趣味活動に関わっている65歳以上19名への、対面での個別面接調査、⑤地域在住高齢者466名への質問紙調査。

加えて、過去に収集した一般高齢者（74歳～86歳、1064人）対象の調査データの二次分析を行った。

4. 研究成果

①COVID-19が高齢者の社会関係、社会参加に与えた影響と、その変化プロセスの検討

COVID-19が高齢者の社会活動や生活、そして主観的 well-being に与えた影響を探索することを目的に、事例研究として、首都圏の住宅地域であるX町で活動しているボランティア活動1団体の参加者らに2020年6月と9月にグループインタビュー調査をオンライン会議システムを用いて行い、どのように生活や社会関係の変化を経験したかを聞き取った。参加者はいずれも70代の男女11人で、コロナ禍前はオンライン会議システムの利用経験はなかったが、ボランティア活動の継続のために利用を開始した。インタビューからは、インタビュー参加者らの前向きで新しいことを取り入れようとする姿勢、周囲の活動仲間からの道具的、精神的、情動的サポート、そして家族、特に子どもや孫からの肯定的な声かけによって、社会活動の継続意欲が高まり、オンライン会議システムの導入に挑戦するという行動が促進されていた。そして、新たな技術を日常生活に導入することで活動仲間との頻繁な交流がCOVID-19流行下においても継続され、また自己効力感につながっていることが示唆された。

このことから、もともとの知識やICT機器利用経験に加えて、本人の性格特性（新しいことに対する前向きさ）、もともと持っていた社会関係からのソーシャル・サポートが行動変容をうながし、それが社会関係の継続（コロナ禍において活動を辞めることなく続けること、活動仲間との頻繁な交流や親密な関係性が継続されたこと）につながり、同時に肯定的な自己観という心理状態を促進したと考えられた。

続いて、上の事例研究を汎化させるため、SNSサービスを利用する中高年者を対象としたインタビュー調査(n=9)をTEA（複線径路等至性アプローチ）を用いて分析し、オンラインでの社会的活動や社会関係が継続する、あるいは中断する経路のモデル化を行った。分析結果から、本人の性格特性（前向きさ、あるいはその反転である変化を好まない態度）および、周囲の社会関係からの規範的影響（周りが使っているから自分も使う）が、オンラインでの社会的活動の開始に影響する個人要因、社会環境要因としてモデルに組み込まれた。活動の継続あるいは中断に影響する要因としては、社会環境要因があり、オンラインの活動でつながった仲間からの誘いが継続を促進する要因として働いていた。

以上の研究結果から、パンデミックは全体的には社会参加や、社会参加を通してつながる社会関係を縮小させる（少なくとも一時的には）方向に作用したが、その中で個人の性格特性や、元々持っていた周囲の他者の存在によって新たな交流の手段や場を獲得することで、関係が維持さ

れたり、肯定的な自己観を獲得したりしたことがわかった。

②オンラインの社会関係と対面の社会関係が主観的 well-being に与える影響の比較

社会関係が健康と主観的 well-being に影響する過程を検討するために、SNS 上での趣味活動、社会参加活動に参加している 40 歳以上への WEB 調査データを用いて、対面での社会関係と、SNS 上での社会関係とを比較した。その結果、ソーシャル・サポートの認知に関しては SNS よりも対面の方が高く、特に COVID-19 によって交流の機会が抑制されたと感じた人ほど、対面での社会関係から得られるソーシャル・サポートを高く見積もり、そこからポジティブな主観的 well-being を得ていた。SNS 上での人づきあいや趣味活動は、コロナ禍という特殊な社会情勢下においてもそれ自体では従来からの対面交流の代替とはならず、むしろより対面での人づきあいや活動が重要視されたと考えられた。

③社会関係の構造的特徴、交流内容の高齢期における変化

以上はコロナ禍のもとオンラインでの調査研究をすすめた過程で得られた結果であったが、2022 年以降は対面での調査研究が可能になったことから、地域でのボランティア活動や趣味活動に関わっている 65 歳以上 19 名への面接調査、地域在住高齢者 466 名への質問紙調査によって、オンラインでの交流や社会関係に限らず、より一般的な社会関係の変化を検討した。仕事からの引退や地域活動の開始、健康状態（身体的、認知的、精神的）の変化が、友人や近隣とのソーシャル・サポートおよびコンパニオンシップに与える影響を検討した。また、それらの影響関係に、個人の心理特性が関連するかを検討した。①②から「前向きさ」や「変化への抵抗」などが関連すると考えられたことから、Big-five の外向性、開放性、そして特性レジリエンスを仮説に盛り込んだ。分析の結果、これらの心理特性は友人や近隣との関係の維持、および主観的 well-being に関連していた。また、特性レジリエンスが低い人において、健康状態は友人関係と正の関連にあったが、レジリエンスが高い人においてはその関連はみられなかった。これらから、自身の加齢は遅からず早からず身体的、認知的機能の低下をもたらすが、それがそのまま社会関係を縮小させるだけでなく、個人の性格特性によっては社会関係を「維持」したり、社会関係からサポートを引き出して関係をより深めることもありうると考えられた。

5. 今後の課題

研究期間中に生じた世界規模での感染症流行により、高齢者の社会的活動も大きな影響を受けた。本来の研究目的では高齢期における社会関係の「獲得」と「喪失」を明らかにすることを目指していたが、コロナ禍においては社会関係や社会的活動の多くが「中断」してしまった。一方で、そのような情勢のなかでも「維持」された社会関係や社会的活動をみることで、社会的状況の変化にうまく対応し新たなコミュニケーションの手段であるオンラインの会議システムや SNS 上での社会活動などを導入したケースの研究を深めることは出来た。また、逆境にしなやかに対処する「レジリエンス」が社会関係の維持や獲得において果たす役割について、今後さらに深く研究を進めることが必要である。なお、社会関係の「中断」については当初の想定にない現象であり、中断した社会関係がもとに戻ったか、戻らず喪失したかまで追うことは現時点では出来ていない。中断は、一時的な入院、家族の世話や介護など、パンデミック以外にも個人の人生において十分に起こりうる。今後は、このような本人の意図に反する社会関係の「中断」を経験したときに、そこからどのように回復するのか、あるいはしないのかについても研究対象としていくことが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 菅原育子	4. 巻 567
2. 論文標題 地域コミュニティにおけるつながりづくりとICTの活用の可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生活協同組合研究	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57538/consumercoopstudies.567.0_32	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 菅原育子・村山洋史
2. 発表標題 対面およびSNS上の交流におけるソーシャル・サポートの感染症拡大下における変化：中高年SNS利用者を対象とした縦断調査から
3. 学会等名 日本老年社会科学会第64回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 I.Sugawara, M.Takayama, Y.Ishioka
2. 発表標題 The protective effect of resilience on shrinkage of friendship in later life
3. 学会等名 The Gerontological Society of America 2022 Annual Scientific Meeting（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原育子
2. 発表標題 中高年者の趣味・地域活動における変化・継続と適応
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菅原 育子
2. 発表標題 コロナ禍におけるオンライン社会参加活動の開始に至る経路の心理社会的分析：中高年SNS利用者インタビューから
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原 育子・村山 洋史
2. 発表標題 中高年者におけるSNSをととしたソーシャルサポートの受領期待とその関連要因：SNS上の交流と対面交流との比較から
3. 学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関